



MG 災害復興ボランティアの役割について

災害復興ボランティアの必要性

宮城学院がある桜ヶ丘地区における被害は、幸いにして限定的でした。しかし同じ宮城県でも、海岸部の津波による被災地域では、多数の尊い命が失われ、市街は無残に壊滅しました。生き残った人たちは、場合によっては身内を失った悲しみをこらえながら、破壊された生活基盤の再建に取り組むこととなります。震災からの真の復興には、今後長い時間が必要となると予想されます。被災された方々はもちろんのこと、東北地方が一丸となり手を携えて、この難局を乗り越えていかねばなりません。ボランティアによる、復興活動への積極的な協力と支援は、地域社会の一員としての宮城学院女子大学の責務です。

多様なニーズを掘り上げる

災害報道は一般に、「避難所で寒さに震える被災者」といった外部者にとって分かりやすい図式においてなされ、外部からの支援もそうした図式のもとに進んでいくという側面があります。しかし、トルストイが「不幸な家庭は不幸のあり方がそれぞれ異なっている」と書いたように、災害がもたらす苦難の形もまた様々です。被災地に足を踏み入れ、一人ひとりからの聞き取りを丹念に行うことで、単純に一括りにはできない問題が現場ごとにあることが見えてきます。

死ぬか生きるか、痛い・寒い・ひもじいといった、誰においても「似通った」、他者からしても想像・共感しやすい苦しみこそ、時が経てば軽減されますが、外部者が一見してもわからないような、人それぞれに個別で複雑な苦難が、多岐にわたる形で蓄積されていくのです。従って、そうした見落とされがちな、一見苦難に見えないような苦難の存在を敏感に察知して、当事者たちの必要に応えることが、被災地支援においては重要になります。被災地に足を運びやすい近距離にあり、また制度的な制約が少なく自由に行動できる MG 災害復興ボランティアは、その立場を生かして、現場の多様なニーズを掘り上げる多様な支援実践の創出に、貢献していかなければなりません。

長期的な支援の継続

被災直後の混乱が過ぎ、だんだんと形の上での「日常」が取り戻されつつありますが、むしろそれからが、被災者たちにとっては長く厳しい日々となります。にもかかわらず、社会的な関心は時とともにそこから離れていきます。そのようななかで必要になるのは、数ヶ月、数年という長期のスパンで、被災者たちが自力で生業を再建し、社会生活を再構築しようとするときに何らかの形でサポートができないかを、ずっと忘れずに気にかけておくことです。災害発生直後には、専門的な訓練の不足ゆえに手の出しようがなかった多数の「素人」たちであっても、被災者たちに力添えしたいという気持ちを消し去らずにいれば、後になって思わぬ仕方で復興に寄与できる可能性が広がります。災害復興ボランティアを一時の熱情に終わらせず、ささやかでもよいので長く継続する。その意識を持ち続けることで、我々が行える小さな貢献を積み重ねて、大きな効果につなげることができるはずです。

本学の学生・教職員によるボランティア活動が被災地の復興にわずかでも役立ち、すべての被災された方々に一日でも早く平安がもどりますよう、祈ります。